

## 竹内整一著

### 『おのずから』と『みずから』——日本思想の基層』

(春秋社・二〇〇四年)

## 藤田 正勝

本書は、さまざまな機会に書かれた論文をもとに、しかし統一的な視点に立って新たに書き改められた九つの章からなる。まず各章の題を列挙しておきたい。

第一章 「おのずから」と「みずから」——日本的「自然」<sup>おのずから</sup>と自己

第二章 無常観と「おのずから」——日本人の現実感覚

第三章 無常の反転——「よしなや」から「面白や」へ

第四章 「おのずから」と「古」——「古学」に拠る人倫の形而上学

第五章 宇宙人生の「不可思議」さ——国木田独歩の覚めざる夢

第六章 「おのずから」の搜索——柳田・漱石・鷗外の自然把握

第七章 近代自己から「おのずから」へ——清沢満之の〈内〉への超越

付論 清沢満之の想念と超越

第八章 生と死の「曖昧な肯定」——正宗白鳥の臨終帰依

第九章 「空即是色」の莊嚴——「みずから」「おのずから」であること

中世文芸から古学、清沢満之や国木田独歩など、その考察の対照は多岐にわたるが、全体を貫く著者の問題意識は三つに整理できるように思う。

一つは本書の主題として掲げられている「おのずから」と「みずから」という二つの概念を相関する二項としてとらえ、その連関を問うという問題意識である。主題に掲げられていることから、この問題意識が本書の中心にあることはまちがいが無いであろう。しかし本書の思索を導いている問題意識はそれだけにとどまらない。第二の問題意識は、副題で言われている「日本思想の基層」に関わる。相関項としての「おのずから」と「みずから」、そこに注目しながら、日本思想の基層を探りだすという意図が本書の根底にあるように思われる。そして第三の問題意識は、著者の専門である倫理学に関わる。日本思想の基底をなす「おのずから」という発想は、倫理学というコンテクストのなかにおいたときどのような意味をもつのか、それは倫理の基礎づけたりうるのか、そのような問題意識が、本書で展開された著者の思索の底に流れているように思われる。本書はこのような複合的な問題意識に支えられて展開されている。それぞれの観点から本書の特徴を見てみたい。

「おのずから」と「みずから」という二つの概念を相関する二項として、その連関を問うという問題意識が本書の中心にあることを述べたが、この点に関わって著者は「はじめに」のなかで次のように述べている。

「日本語では、「おのずから」と「みずから」とは、ともに「自(か)ら」である。そこには、「おのずから」成ったことと、「みずから」為したことが別事ではないという理解がどこかで働いている」(iii頁)。

実際、われわれはわれわれの日常生活のなかでも、両者が一つに結びついていることをしばしば経験する。「論文ができあがりました」、「話がまとまりました」、「就職することになりました」といったたぐいの言葉にわれわれは日々接する。一見、論文を書いた自分が、あるいは決断をした自己がいらないかの如くである。しかし著者はこのような表現のなかに——あるいはこのような仕方でなされる経験のなかに——かけがえのない「みずから」が存在しているのを見いだす。具体的には次のように言われている。「その時にいたるまでのもろもろの出来事において、「みずから」をうながす、あるいはふりかかると働きがそれとして感受されているのであって、そうした感受性においては、感受する主体としての「みずから」は必ずしも無みされていない。「みずから」が「おのずから」の働きに不可避に与りつ

つもおお、かけがえのない「みずから」を生きているといった受けとめ方がそこにはあるだろう」(iv-v頁)。

「みずから」の営みを超えて働く働きを感受し、同時に、その働きに与りつつ「みずから」を生きたるという態度——ないし経験——のなかに著者はまさに「おのずから」と「みずから」との相関を見ていると言つてよいであろう。

もちろん著者は、そのような事柄のとらえ方——あるいは経験の仕方——が問題をはらむことに気づいていないわけではない。そのような態度が、人生の出来事は結局のところ「みずから」には担いきれないものであるという開き直り、あるいは責任回避に結びついていく可能性があることに気づいている。そのようなマイナスの面があることを踏まえつつ、そのような経験の仕方——「おのずから」と「みずから」とを、ともに「自(か)ら」という一語で語りうるような基本発想——が、日本人の「繊細でゆたかな情感をもった独自の思想文化を育ててきた」(vi頁)と言える点に著者は注目する。「おのずから」と「みずから」との相関が、日本の思想文化の伝統を理解し、その本質を把握する「基本軸」になりうるのではないかという意識が、本書における著者の思索を支えていると言つてよいであろう。

## 二

そのような観点から「日本思想の基層」に迫ろうとするとき

著者がまず注目するのが親鸞の「自然法爾」の思想である。「みずから」の営みを超えて働く働きへの……感受性」といった言葉で「おのずから」と「みずから」との相関を著者が説明するとき、そこにすでに、親鸞の「自然法爾」の思想がこの相関のモデルとして思い描かれていたことが窺われる。

もちろん「自然といふは、自はおのづからといふ、行者のはからひにあらず、然といふはしからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆへに爾といふ。……自然といふはもとよりしからしむるといふことばなり」という言葉で言い表された親鸞の「自然法爾」の思想それ自体のなかに、いま述べた相関ないし相即が見いだされるかどうかは一つの問題になりうるであろう。親鸞の力点は「はからい」ではなく、どこまでも「もとよりしからしむる」という点に置かれているからである。

しかし他方、著者のような仕方での「自然法爾」の思想を解釈することが不可能なわけではない。本書第一章でも引用されているが、西田幾多郎は『日本文化の問題』（一九四〇年）のなかで次のように記している。「親鸞の自然法爾と云ふ如きことは、西洋思想に於て考へられる自然といふことではない。……それには事に当つて己を尽すと云ふことが含まれてゐなければならぬ。そこには無限の努力が包まれてゐなければならぬ。唯なるがま、と云ふことではない。併し自己の努力そのものが自己のものではないと知ることである。自ら然らしめる

ものがある」と云ふことである」。

ここでは「あるがまま」あるいは「なるがまま」の根底にある「無限の努力」への注目がなされている。しかもそれがそれを超えたものによつて包まれている、つまり、それによつて「自ら然らしめ」られている。まさに「おのずから」と「みずから」との相関として「自然法爾」の思想が読み解かれている。筆者はこのような読解の線上で親鸞を理解し、そこに日本思想の基層を見ようと言つてよいであろう。そのような相関——「おのずから」と「みずから」とを、ともに「自（か）ら」という一語で語りうるような基本発想——は親鸞や、それと並んで筆者が挙げる道元など、すぐれた宗教家のなかだけではなく、広く日本人の現実感覚のなかに見いだされる。数多くの例を筆者は挙げているが、たとえば世阿弥の作と考えられる「娘捨」に登場する老婆、「おのおの」を「おのおの」において、決して解消しえない「おのおの」を生きつつ、なお森羅万象、宇宙・自然の働き、リズムにおいて「ことごとくおのおの」として「成就」せしめようと」（二四頁）する老婆などもその一例である。

伝統的な無常観もまた、そのような「おのずから」と「みずから」との重なりを示している。無常観は、ただ生のはかなさに対する悲嘆からのみ成り立っているのではない。そのようないかんともしがたい定めに對する肯定的な感情に伴われているところにその特徴がある。その点を著者は次のように言い表し

ている。「無情をかこつ「みずから」が、そこに同時に「おのずから」の働きを見出したときに、それをそれでよしとする肯定的な感慨・興趣を味わうことができる」(四六頁)。

あるいは、くり返し人生の「不可解」を語り続けた正宗白鳥が晩年にそこへと到った「曖昧な肯定」(一九二頁)——たとえば「文学生活の六〇年」で吐露される「しかしまあ、いま生きてゐる、今日を生きてゐると、明日はもう一つの光がさすんぢやないか」という言葉によつて示されるような心境——のなかにもまた、この「おのずから」と「みずから」との重なりを見ることができるのであろう。

このように本書においては、さまざまな時代の、さまざまな文献から、「日本思想の基層」としての「自(か)ら」が「みずから」と掘り起こされているが、そこにさらに一步を望むとすれば、原理に関わる考察であろう。具体的に言えば、思想における「基層」とはいったい何なのか、それはいかにして見いだされるのか、あるいは、ここで取り扱われたものがいかなる意味で「基層」と呼ばれるのか、このような原理的な問いには本書では十分にまなざしが向けられていないように思われる。多くの文献を狩猟した上での上での立論に、さらにいま述べたような原理的な反省が加えられるならば、「日本思想の基層」論として、本書がもつ意味はよりいっそう大きくなるのではないであらうか。

### 三

さて、第三の問題連関は、著者の専門である倫理学に関わる。著者は「あとがき」で、「伝統を流れてきた「おのずから成る」という発想は、倫理学の根本問題を考えるにあたって如何なる意味をもつか」という相良亨の晩年の問いに言及しているが、著者の本書での仕事は、この問いを引き継ぐものであると言つてよいであらう。

しかし、この日本人のなかに広く見いだされる「おのずから成る」という発想は倫理学上の根本問題を考えるうえでどのような意味をもつかという問いは、簡単には答えを見いだすことができない問いであるように思われる。「おのずから」、あるいは「おのずから成る」という発想は、倫理学というフィールド、あるいはその問題連関のなかに置いたとき、すぐに一つの疑問に出会うことになる。倫理はまさに自ら意志を規定するところに、そして自らの行為に対して責任を負うところに成立すると考えられるが、「おのずから」という発想は、この倫理の基礎を根底からくつがえすのではないか、という疑問が浮かびあがってくるのである。

この発想は、日本の「文化」というコンテクストのなかにおいたときには、その基底を明らかにするキー・コンセプトとして重要な機能を發揮しうるし、著者はそのことを巧みに本書において示したと言えるであらう。しかし倫理学という文脈のな

かにおいたときには、倫理学そのものの根幹に関わる問題を惹起するのである。

この疑問に著者は直接答えることをしていない。しかしその問題が著者に意識されていたことは、たとえば第四章「おのずから」と「古」——「古学」に拠る人倫の形而上学」などに明瞭に見てとることができる。

ここで問題にされているのは、古学派、とりわけ伊藤仁斎の倫理観であるが、それをもっとも的確に言い表した言葉として著者は「夫れ人倫有るときは即ち天地立つ。人倫無きときは即ち天地立たず」（『童子問』下五〇）という言葉を用いる。ここで言われる「人倫」とは、「聖人は天下古今同じく然る所の道を明にして、天下古今同じく然る所の徳を尊び、人をして由て行はしむ」（『童子問』下二一）、あるいは「有る者は自ら有り無き者は自ら無し。明々白々、復疑を容るる所無し」（同下二八）といった言葉から見とれるように、あきらかに「おのずから」という性格をもったものである。それは、「智を用ひ自ら私し、専ら己有ることを知て、天下万世同じく然るの道を知らざるが故なり」（『童子問』中七二）という仏教や道家の立場に対する批判と背中合わせになっていることから知られる。

「智を用ひ自ら私し、専ら己有ることを知て……」という言葉から明瞭に見て取れるように、古学の「人倫の形而上学」のなかでは、「みずから」が端的に否定されている。いかにして「おのずから」という発想は倫理の基礎たりうるのか、という

問いに対する答えは、そこに直接見いだすことはできない。

それではいかにして答えうるのか、その問いは開かれたまま置かれている。評者自身にも、その問いに答える準備が十分にありわけではないが、それに答える一つの可能性は、たとえば著者が第一章で引用している九鬼周造の次の言葉のなかに見いだすことができるのではないだろうか。一九三七年に行った講演「日本的性格」（『九鬼周造全集』第三卷所収）のなかで九鬼は次のように語っている。「日本の道徳の理想にはおのづから自然といふことが大きい意味を有つてゐる。殊更らしいことを嫌つておのづからなところを尊ぶのである。自然なところまで行かなければ道徳が完成したとは見られない。その点が西洋とはかなり違つてゐる」。「おのずから」は「みずから」を排除した「おのずから」ではない。むしろ「みずから」を経て、はじめてそこへと至りうる。「おのずから」、その意味で「みずから」の完成とも見なすことのできる「おのずから」である。この九鬼の理解が、「おのずから」という発想がいかにして倫理と結びつきうるのかという問題を問います。ある一つの方角を指し示していると言えるのではないであろうか。

（京都大学教授）